行灯の民俗　　高橋　貴

はじめに

本発表の目的は、江戸期の文書において行灯がどのように表現描写されているか検討し、行灯の民俗についての概要把握に努めること、である。そのため配布用レジュメにはできるだけ原典を引用し、それに沿って説明した。参照した資料は古事類苑、井原西鶴集、日本随筆大成を中心に、日記、黄表紙、浮世絵、図会などである。これらはその一部を参照したにすぎないが、それでも行灯について興味深い事実がいくつか判明した。

発表内容

取り上げた項目は以下のとおりである。

①行灯はかつて持ち歩いた　②行灯の利点　③地域性　④さまざまな形、呼称
⑤植物油と魚油　⑥油の値段　⑦油は貴重品　⑧油皿　⑨灯心　⑩火をつける　⑪治療
⑫お供え、まじない　⑬神経集中　⑭遊郭の灯り　⑮妖怪　⑯百物語　⑰青行燈

①から④までは行灯の特徴について論じた。行燈は元禄のころまでは持ち歩くもので、そのため「行」という字が使われる（1)、角行灯は江戸で、丸行灯は京阪で用いられた（2)、丸行燈は江戸初期に小堀遠州によって発明された（3)。これらは行灯の基本事項であり、事典などでもしばしば言及される。行灯は夜間の生活を一変させた照明具であるが、さらに行灯の上部に遮蔽版を置くなど、使い勝手をよくする工夫も行われた（4)。行灯にはさまざまな名称があった。しほんばり、丸あんどん、まはしあんどん、ゑんちゃんどん、はちけん、かさあんどん、つりあんどん、はつほう、につほん、さんとくなどである（5)。今日でもこうした方言があるのかどうか、地方の民俗誌にあたる必要がある。

⑤から⑧は燃料としての油である。油は、綿実を絞ったものが黒油、それを精製したものが白油で、これに菜種油を入れて灯油（ともしあぶら）とする。黒油から白油に精製する方法は元和年間（1615 - 1624）に発見された。土蔵に塗るための石灰が偶然黒油に入って白くなり、また火つきもよくなったという（6)。油は貴重品のため、工程を省いたり、割合をごまかしたりする奸商もいた。質は劣るが、魚油もかなり使われた。魚油の中では鯨油が第一とされた。『経済要録』には「其色清クシテ臭気少ク、以テ燈火ニ用ルニ、光白ク明亮ナリ」とある。これに対して、鰯はもっとも多くとれるが、「其臭悪ク最モ下品ナリ」という（7)。『世間胸算用』には大坂から江戸へ樽廻船で送られる「下り油」について興味深い例がある。

> 江戸廻しの油、寒中に氷らぬ事を分別仕出し、樽に胡椒一粒づつ入れる事にて、大分利を得て、年をとりける（8)

当初、油は関西で生産され、それを江戸まで船で送っていた。そのとき油が凍らないよう胡椒を入れることを考えついた人が大儲けして余生を送ったという話である。

油が高価であったことは間違いないが、いくらだったのか。三田村鳶魚『江戸の生活と風俗』によると、天保７年（1836）は１升当り 640 文した（9)。『名陽見聞図会』では同じ年の９月が「油一升 670 文」、10 月が「油一升 800 文程」とある（10)。江戸時代、金１両＝4000 文であった。当時の銭１文は現在の貨幣価値で 15 円とみなすと（11)、油１升は１万円から１万２千円にもなる。これでは庶民は行灯に火を灯して優雅に夜を過ごす、というわけにはいかない。行灯を使うにしても節約が求められた。たとえば「白礬を水に加へ燈心を煮て、ともし火に點ずれば、あぶらの減る事すくなし」（12）などの工夫がなされた。尾張ではつぎのような張札が出された。「油一升ニ酢壱升・塩を加へて用ゆべし。大ニ益あり」。これを試した人がいたが、「ビシビシとはぜ、光りも一向なし」だったという（13)。井原西鶴は二人の対照的な女性を描いている。一人は倹約を心掛ける女性である。

> 座敷に灯かかやかせ、娘を付け置き、「露地の戸の鳴る時しらせ」と申し置きしに、この娘しをらしくかしこまり、灯心を一筋にして、嗲（ものもう）の声する時、元のごとくにして勝手に入りける（14)

客のいないときは灯心の数を減らして油を倹約する女性で、しおらしい娘と表現された。もう一人は

> 有明（行灯）に灯心六筋七筋入れてかがやかせ、傘はほさずに畳み、門浄瑠璃に銭米をとらせ、毎日、湯わかして水へ入る（15)

ような女性だった。夫からすぐに離縁されたことはいうまでもない。

⑨[灯心]　ここでは子灯心という、特別な日に購入する灯心に注目した。『日次記事』には次のように書かれている。

> 凡そ一年中、六甲子の夜、禁裏にて子を祭せらる。大乳人、小豆粥を御前に献じ、並びに殿中の男女を饗せらる。凡そ甲子毎に民間にては灯心を買ふ。俗に子灯心といふ。その内十一月の甲子を以て最と為す。～六甲子の夜、子を祭る、これを子祭りといふ(16)

つまり年６回の甲子日に、禁裏では子（ね）祭りを行って、小豆粥をふるまった。民間では灯心を買い、これを子灯心といった。子の日と小豆粥、灯心の関係が深いことがわかる。柳亭種彦も次のように述べる。

> 甲子日に燈心を買へばかならず其家富栄ゆるるといふ事正しき証は知らざれど是大黒へ福を祈るより出し事なるべし（17)

子灯心を買えば家が富栄えるとの確証はないが、大黒天信仰と関係がありそうだというのである。では甲子日と大黒天はどのような関係にあるのか。次のような資料がある。

> ・日蓮上人三面大黒天の讃文云、甲子の日毎に生黒豆百粒をもて祭るべし。是秘中の秘なりとぞ（18)
>
> ・禁中行事にも十月子祭は大黒天神を祭り黒豆飯を供へらるるとなり（19)

とある（笹間良彦『大黒天信仰と俗信』にもとづく)。この二つの事例によると、大黒天には生黒豆か黒豆飯が供えられる。『日次記事』の小豆粥はこの黒豆（大豆）とたぶん同じ意味を持つ。濃い色（黒色ないし赤色）の豆という点では共通している。笹間良彦は黒豆に注

目し、次のように述べる。

黒豆は鼠に擬したもので、大黒天の御意を得るために鼠と見立てた黒豆を供えたものであるから、当時すでに鼠は大黒天の使いと見る風習があった（20）

黒豆は大黒天の使いである鼠を象徴しているというわけである。大黒天は、そもそもインドのマハーカーラ（大黒）で、この神はシヴァ神の化身とされる。シヴァ神の息子であるガネーシャの乗物（ヴァーハナ）は鼠であり、大黒天と鼠（子の日）のつながりはインドに由来するようだ。ガネーシャは富の神でもあり、そこから子灯心を買うと家が富栄えると考えたのかもしれない。また鼠は大国主命（大黒天と習合）を窮地から救った存在であることも忘れてはならない。

⑩から⑬ではそれぞれ興味深い事例を紹介した。

⑩［火をつける］　狐つきの人が行灯障子に火をつけた例（21）である。しかし同書の著者朝日文左衛門は野次馬根性旺盛で火事についてしばしば言及しているが、行灯から火事になったとの記述は見られなかった。他の書でも今のところ見当たらないが、この点は少し不思議に感じている。

⑪［治療］　油を使って治療する例がいくつかある。

火傷には牡蠣の粉を水にてとき塗てよし、又燈油をぬるもよし

胡椒にむせて絶死したるに口より油を流し入しかば蘇生しといふ（22）

効果のほどは不明である。また山東京伝は、6 本指の女性が医者から百両見せられ、指を切断する決心をしたときの話を書いている。そのとき医者はつぎのように語る。

金箔で痛みを止め、梳油を付けて血止めを付けると、直に治りやす。しかし明日の朝ちっと痛むによ（23）

⑫［お供え、まじない］　儀礼のときの行灯は日常とは異なる使い方をした。

あんどんを押板にても、又は床にても置事、ともし火を面に置也、後へなして置事有べからず、無祝言也、亡霊手向時は後へする也（24）

床の間に行灯を置くとき、祝儀のときは灯火を手前にし、不祝儀のときは奥にすべきという。まじないに関する話もある。

今の俗薺の薹のみのりたるを、ぺんぺん草と呼て、紙燈（アンドン）にかけ繋ぎ、夏虫を避るの呪とす（25）

夏の行灯にはたくさんの虫が明かりを求めてやってくる。それを薺（なずな）あるいはぺんぺん草を吊り下げて虫よけのまじないとした。『江戸あじわい図譜』にはつぎのような記述がある。

この日（4 月 8 日）、ぺんぺん草というのを五、六本採ってきて糸で逆さにくくり、行燈の下に吊るしておくと、虫除けのまじないになる（26）

時期は異なるが、同じ習俗といってよいだろう。

⑬［神経集中］　神経を集中するときにも行灯が使われた。

利勝ノ家士ニ寺田與左衛門ト云者アリ、此者モ深智遠謀ノ者ニテ、家光公ニモ事ニヨリ

テハ、此事與左衛門ニ問テ来レト仰セ有シ事アリ、此與左衛門即答デキザル時ハ、宅へ帰リ、一間へ籠リ、戸ヲ立、夜分ノ如ク行燈ヲトモシ、其モトニ坐シテ事ヲ考へ、決定スルニ、一度モ誤リシ事ナシト也（27）

⑭［遊郭の灯り］　庶民が高価な油をできるだけ節約したことはすでに述べた。それと対照的なところが遊郭であった。現在のネオン街のように、色街の夜は煌々としていたが、それを演出したのが行灯であった。式亭三馬の『傾城買談客物語』（28）には人の背丈以上に大きな行灯に油を注ぐ下働きの男性の姿が描かれている。また葛飾北斎の娘応為が描いた肉筆浮世絵「吉原格子先之図」（29）では幻想的な光景が浮かび上がる。格子の向こう側に何人もの遊女が座っている。その手前に大きな行灯が置かれ、周囲に強烈な光りを投げかけている。また江戸新吉原では妓館の前にたそや行灯が立っていた。終夜明かりを灯していたが、これも遊郭の演出の一つといえる。

井原西鶴『好色五人女』には遊郭での冷たい仕打ちが描かれている。父親が揚屋（遊郭）に乗り込んできて、遊んでいた息子を勘当した。そのとたん、店側の態度が手のひらを返したようになる。

はや、揚屋には、げんを見せて、手叩きても返事せず、吸物の出時淋しく、「茶のも」といへば、両の手に天目二つ、かへりさまに油火の灯心をへしてゆく（30）

手を叩いても返事をせず、油を消耗するのがもったいない、とばかりに灯心の数を減らされたのである。

⑮妖怪　ここではおもに油をなめる妖怪を取り上げた。井原西鶴『本朝二十不幸』にはつぎのような描写がある。

そのうちに日数が経って、その子は何時か三つになったが、或る夜不図目を覚ましたかと思ふと枕元に近く置いてあった、灯油の入った土器を取り上げて、まるで酒か何ぞのやうに一滴も残さず飲み乾してしまった。その後試して見るのに、毎晩飲まないと云ふことはなかったので、終ひにはこの辺で、誰一人知らないものがない位評判になり、彼方でも此方でも油を飲ませて、前代未聞のことだと云ふ取沙汰になった。泣く時は油と云ふと、そのまま機嫌を直すのが、全く不思議な位であった。（31）

鳥山石燕の『画図百鬼夜行』には、油赤子という妖怪が描かれている。そこに次のような詞書がある。

油赤子　近江国大津の八町に玉のごとくの火飛行する事あり。土人云むかし志賀の里に油をうるものあり。夜毎に大津辻の地蔵の油をぬすみけるが、その者死て魂魄炎となりて今に迷ひの火となれるとぞ。しからば油をなむる赤子は此ものの再生せしにや（32）

つまり油を盗んだ人の魂魄が迷い火となり、油をなめる赤子として再生したのではないかという。これと同様の話が『諸国里人談』（33）にあることはよく知られている。油をなめる妖怪は他にもある。「油なめの禿」（34）、「油をなめるろくろ首」（35）、歌川国芳画「古猫之怪（油をなめる猫）」（36）などである。

⑯百物語　百物語は、夜に数人が集まり一人ずつ怪談話をする会をいう。行灯に 100 本の灯心を灯し、一つの話が終るごとに 1 本ずつ消してゆく。百本目の火が消えると、妖怪が現れるという。百物語に関する資料は数多くあり、ここで全体を検討することはできないので、３つの百物語だけを紹介した。一つ目は仮名草子である。

「百物がたりして蜘蛛の足をきる事」

血気の袖どち、むれつつはなす夜、「百ものがたりすればおそろしき事有りといふ。いざせん」と、せちにはなすに、はや九十九にをよぶ。「よしさら、まず三寸（みき）くみてよ。事せくな」などいひて、順盃とりどり色めいて侍るに、ひとり立て重のさかなたづさへて円居のこらず末座までひきまはりしに、其とき「ここへもひとつ」とて、おほきなる手を天井よりさしだす。はやきもの有て、ぬき打にきる。手ごたへなふして糸なんど切るがごとし。おつるを見るに、くもの手三寸ばかりきりたり。「さてこそ百のはなしのしるし有けれ」とかたる。まことにおそろしき虫にあらずや（37）

百物語の恐ろしさが表現されているが、一番肝心のところで、三寸ということばが二度でてくる。一度目は「みき」と読ませ、酒を意味する。二度目は、その声に応えて大きな蜘蛛が天井から手を下すと、そこにいた者が刀で切ってしまう。その手の長さが三寸だった。ここには妖怪話の恐ろしさよりも、語呂合わせの妙に焦点があっている。

二つ目は、井原西鶴『武道伝来記「火燵も歩く四足の庭」（38）である。ここでも物語が進んでいくにつれて緊迫感は増してゆく。あと一つで百になるというとき、火燵（こたつ）が一人で動き出し、縁側より外に出ていった。参加者の一人が手槍を引っ提げてこたつを突き刺すと手ごたえがあった。後に殿さまに報告できるように、参加者たちは連名で確かにあったことの証として証拠状に署名する。そしていざ化物の正体を見ようと、ふとんをめくると、飼い犬であった。一同大笑いして帰ったということである。恐怖の話が笑い話で終わっている。

三つ目は森鴎外の『百物語』(39)。友人から誘われて百物語の会に参加するが、端から気乗りがしない。「百物語は過ぎ去った世の遺物」、「イブセンの所謂幽霊になってしまっている。それだから人を引き附ける力がない」など否定的な態度で接し、結局は会が始まる前に帰ってしまう。

これら三つの百物語を見ると、怖い話というより語呂合わせや笑い話になっており、すでに文芸的な側面が強くなっていることがわかる。鴎外の百物語にいたっては、書かれた時期が明治末、しかも著者が日本を代表する知識人ということもあってか、過去の遺物でしかなくなっている。百物語の道具立てとしてかつては行灯が使われた。江戸初期はまだ蝋燭は高価であったが、後期になると安価になり、むしろ蝋燭が利用されるようになった。鴎外のときも百本の蝋燭が使われている。

⑰青行燈　鳥山石燕が描いた妖怪である。ここでも百物語が登場する。詞書は次の通り。

燈きえんとして又あきらかに影憧々としてくらき時青行燈といへるものあらはるることありと云、むかしより百物語をなすものは青きカミにて行燈をはる也、昏夜に鬼を談ずることのなかれ、鬼を談ずれば怪いたるといへり（40）

昔から百物語をするときは青い紙を張った行灯が使われた、とある。行灯の向こう側には角を生やした長い髪をした女性がいる。行灯の扉ははずれ、手前には文箱、手紙、針箱、ものさし、櫛、かんざしが乱雑に置かれている。女性は憤怒の形相をしてじっとこちらを睨んでいる。誰かが鬼（き）を談じた結果、現れた怪異ということだろうか。

３　まとめ

江戸時代の記録から、行灯が単なる照明具ではなく、社会的、経済的、機能的、宗教的、文芸的な面で多彩であることがある程度明らかになったと思う。しかし目にしてない資料はまだ膨大にあり、今後検討を重ねることにより、さらに興味深い事例が現れると思う。今後の課題はたくさんある。文献資料の分析、学術研究の参照、民俗事象との照合などである。暫定的な結論（仮説）を以下のようにまとめ、今後の研究への足掛かりとしたい。

①行灯は江戸時代前半までは持ち運ぶものであり、それは「行」ということばに表れている。
②行灯には地方差があった。江戸は角行灯、京阪は丸行灯で、地方での呼称もさまざま。
③油は高価であり、人びとはいろいろな工夫をして節約に努めた。
④子灯心は行灯と鼠の関係が深いことを意味する。大黒天と鼠の関係はインドに由来か。
⑤行灯に火事はつきものと思われるが、そうした記事はあまり見られなかった。
⑥行灯を儀礼のときに使う場合、置き方や灯心の向きなどに留意する必要があった。
⑦行灯にぺんぺん草を下げて夏の虫除けのまじないとした。
⑧神経を集中させるために行灯の薄明かりが用いられた。
⑨遊郭では集客のために豪華な明かりが演出された。大きな行灯、たそや行灯など。
⑩行灯の明暗は妖怪を連想させた。とくに油をなめる妖怪が注目され、歌舞伎や浮世絵の題材になった。
⑪百物語は、闇の世界の恐ろしさを表現するが、当初から語呂合わせや落ちがあるなど文芸的な面が強かった。
⑫青行燈は、青い行燈のもとで百物語をした結果生み出された妖怪か。

４　質疑応答

参加者からさまざまなご教示をいただいた。

屋外で使用する行灯もたくさんある。蟹江町の須成祭では多数の行灯を巻藁船に乗せる。油が自動で補給されるねずみ灯台、折りたたまない御所提灯などの照明具もある。伊勢から美濃南部には「四日市水」という菜種油の生産があり、これが全国の油の品質を決める基準になった。鯨油を田にまいて除蝗薬にした。このほか展示上の留意点、古典籍の研究方法へ

の助言、参照すべき文献などの御教示もあった。

これに対し、祭礼や夏季のイベントなどの行灯も検討の対象にしたい、文献調査と民俗調査は今後も進めていく、などと回答した。

引用・参考文献

（１）山東京伝「骨董集」『日本随筆大成第 1 期 15』吉川弘文館、平成 6 年、p. 395

（２）喜田川守貞『守貞謾稿第 3 巻』東京堂出版、平成 4 年、pp. 72-74

（３）山岡元隣「寶蔵」『貞門俳諧集 2　古典俳文学大系 2』集英社、昭和 50 年、p. 47

（４）大枝流芳「雅遊漫錄」『日本随筆大成第 2 期 23』吉川弘文館、平成 7 年、p. 280

（５）越谷吾山「物類稱呼」『古事類苑器用部 20』p. 243、
国文学研究資料館蔵、DOI: 10.20730/200002932

（６）久須美祐雋「浪花の風」『日本随筆大成第 3 期 5』吉川弘文館、平成 7 年、pp. 390-391

（７）佐藤信淵「経済要録」『古事類苑器用部 21』pp. 322－323
江戸東京博物館蔵、DOI: 10.20730/100414028

（８）井原西鶴「世間胸算用」『新編日本古典文学全集 68』小学館、1996 年、p. 462

（９）三田村鳶魚『江戸の生活と風俗』中公文庫、1998 年、p. 125

(10) 歌月庵喜笑『名陽見聞図会』服部良男編、美術文化史研究会、昭和 62 年、
p. 543 と p. 546

(11)『新編日本古典文学全集 66』、小学館 1996 年、p. 588　など参照

(12) 貝原益軒「萬寶鄙事記」『古事類苑器用部 20』p. 229
お茶の水女子大学図書館蔵、DOI: 10.20730/100240121

(13) 歌月庵喜笑『名陽見聞図会』服部良男編、美術文化史研究会、昭和 62 年、
pp. 546-548

(14) 井原西鶴「日本永代蔵」『新編日本古典文学全集 68』小学館、1996 年、p. 57

(15) 井原西鶴「万の文反古」『新編日本古典文学全集 68』小学館、1996 年、p. 252

(16) 黒川道祐『日次記事』、国文学研究資料館蔵、DOI:10.20730/200020491

(17) 柳亭種彦「柳亭筆記」『日本随筆大成第 1 期 4』吉川弘文館 平成 5 年 p. 345

(18) 谷川士清「鋸屑譚」『日本随筆大成第 1 期 6』吉川弘文館 平成 5 年、p. 441

(19) 喜多村筠庭『嬉遊笑覧３』岩波書店、2004 年、p. 426

(20) 笹間良彦『大黒天信仰と俗信』雄山閣、平成 5 年、p. 120

(21) 朝日文左衛門「鸚鵡籠中記」『名古屋叢書続編第 12 巻』p. 325

(22) 暁晴翁「雲錦随筆」『日本随筆大成第 1 期 3』吉川弘文館、平成 5 年、p. 130 と p. 132

(23) 山東京伝「狂言末広栄」『山東京伝全集第 1 巻』ぺりかん社、1992 年、p. 420

(24) 今川貞世「今川大雙紙」『群書類従武家第 22 巻』昭和 57 年、p. 504

(25) 小山田与清「松屋叢話」日本随筆大成第 2 期 2、吉川弘文館、1994 年、p. 29

(26) 高橋幹夫『江戸あじわい図譜』青蛙房、平成 7 年、p. 215

(27) 真田増誉「明良洪範」『古事類苑器用部 20』 p.247
(28) 式亭三馬『傾城買談客物語』、国文学研究資料館蔵、DOI：10.20730/200016246
(29) 葛飾応為「吉原格子先之図」太田記念美術館蔵
(30) 井原西鶴「好色五人女」新編日本古典文学全集 66、pp.258 - 259
(31) 井原西鶴「本朝二十不幸」、吉井勇『現代語西鶴全集７』昭和 6 年、春秋社、p.89
(32) 鳥山石燕『画図百鬼夜行』国書刊行会、1993 年、p.134
(33) 菊岡米山「諸国里人談」、大橋乙羽校訂『紀行文集』博文館編輯局、大正 2 年 p.931
(34) 恋川春町「妖怪仕内評判記」、DOI:10.11501/9892372
(35) 唐来山人「怪談四更鐘」、近藤瑞木編『百鬼繚乱』国書刊行会、2002 年、p.51
(36) 歌川国芳画「古猫之怪」東京都立図書館蔵
(37)「御伽物語」『仮名草子集 新編日本古典文学全集 64』小学館、1999 年、p.469
(38) 井原西鶴「武道伝来記」『新編日本古典文学全集 69』、小学館、2000 年、pp.198-200
(39) 森鴎外「百物語」『現代日本文学全集７』平成 12 年、筑摩書房、p.386
(40) 鳥山石燕『画図百鬼夜行』国書刊行会、1993 年、p.214

(2023 年 5 月 13 日提出)